慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本語における助詞「とか」の多義性の分析
Sub Title	Etude de la particule TOKA en japonais contemporain
Author	芦野, 文武(Ashino, Fumitake)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.2 (2020. 12) ,p.14 (167)- 26 (155)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小倉孝誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190002-0014

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代日本語における助詞「とか」の多義性の分析[1]

芦野　文武

1. 導入

現代日本語の助詞「とか」は，助詞「と」と「か」が結合したものであり[2]，主に話し言葉で頻繁に用いられる多義的な助詞である。先行研究を総合すると，「とか」には次のような用法が区別できる。

（1）　休日は読書とか，散歩とかして過ごしています[3]。

（2）　お茶とか飲もうか？　　（劉 2011）

（3）　トマトとかよく食べれるね。　　（洞澤・奥村 2015）

（4）　娘さんが結婚されたとか聞きました。

（1）は，「並列」（または「並立」）や「一部例示」と呼ばれ，休日の過ごし方として「読書」や「散歩」を例として並列・列挙する用法であると言われる。これらの要素は，それを含む集合の一部であり，明示されていない集合内の他の要素を暗示する[4]。なお，並列・列挙される要素が 1 つだけの場合もあり，「単独用法」とも呼ばれる（cf.「休日は読書とかして過ごしています」）。（2）は，「断定回避」や「ぼかし表現」などと呼ばれる用法であり，「お茶」を唯一の選択肢とは限定せず，ほかにも「飲み物」の選択肢があることを暗示することによって，「聞き手への配慮」を表したり，「表現を柔らかくしたりする」など，様々な語用論的な機能があるとされる[5]。（3）は「卓立的提示」（cf. 天野 2001）や「強調用法」（cf. 洞澤・奥村 2015）と呼ばれる用法であり，「トマト嫌いの話者が平気でトマトを食べる友人に驚いている」ことが「とか」によって強調されているとされる（洞澤・奥村 2015 :11）。（2）と（3）は，いわゆる「若者ことば」と呼ばれ

る「とか」であり，若者の会話の中で頻出することが知られている。最後の（4）では，「とか」は前述の要素「娘さんが結婚された」が「引用句」であることをマークしており，しばしば「言う」，「聞く」，「思う」などの動詞を伴って，引用句の内容が「不確か」であることを表すとされる。

本稿では，これらの用法を統一的に説明できるような仮説を提出し，それぞれの用法は，仮説を構成するパラメタの間の関係が，文脈に応じて様々に解釈されることから記述できうることを示したい。

2. 先行研究

「とか」については既に多くの先行研究が存在する。そのうち，この助詞が持つ複数の用法の間の関係を説明しようと試みている研究を２つのみ以下で取り上げる。

天野（2001）を発展させた洞澤・奥村（2015）は，「一部例示」，「ぼかし・断定回避」，「強調」という3用法の間の境界は曖昧であり，次のような例文では，どの用法とも解釈されうると指摘している。

（5）（母から夕食は何がよいか聞かれたとき）　シチューとかがいい。

（洞澤・奥村 2015 : 12）

洞澤・奥村によると，「一部例示」に，話者による「聞き手への配慮」などの語用論的機能が加わると「ぼかし・断定回避」として解釈され，また，「一部例示」で想定される集合が，話者にととって「プラス／マイナスの評価が際立ったもの」である場合には，「強調用法」と解釈されると述べる。この場合，「強調用法」は，「シチューは話者がとても食べたいというプラス評価をもつ食べ物から構成される集合の要素」であるとしている。結論として，洞澤・奥村は，「とか」の基本的意味は「一部例示」であり，その他の用法はこの基本義の「拡張」であるとし，「一部例示」→「ぼかし・断定回避」→「強調」の順番で意味の拡張を想定する。

一方，「とか」の「並立用法」，「断定回避用法」，「引用マーカー」としての用法の関係を扱っている砂川（2000）は，一見無関係に見える「並立用法」と「引用マーカー」としての用法に関し，前者のもつ「並立性」・「曖昧性」と，後者のもつ「連続性」（cf.「とか」で引用される発言は一言ではなく，発話の連続である

(*ibid.* : 72))・「不確定性」が比喩的に類似しているという考えを提出し，並立用法が並立の意味を徐々に失って曖昧性を帯び，引用マーカーとして機能するようになるという「文法化」のプロセスを措定している。

本稿では，「とか」の多義の説明原理として，基本義からの「意味の拡張」や，「文法化」などの概念は用いない。それに対して，「とか」が，個々の意味・用法を越えた，1つの抽象的な表象（＝意味的同一性）を持つと考え，それぞれの意味・用法は，文脈における，意味的同一性の特殊な実現であるという立場から考察する[6]。

3. 仮説

「とか」で標示されるタームを x，x が所属するクラス[7]を X とし，次のような仮説を提案する。

「とか」の仮説：「話者は x を，クラス X の安定化されていない要素として提示する」

以下，この仮説について補足的コメントを行う。

— 「安定化されていない要素」（un élément non-stabilisé）をどのように解釈するかは各用法によって異なる。その都度明示する。

— 「とか」が繰り返される場合，それを「x_1 とか，x_2 とか ... x_n とか」と表記する。

— 「とか」の多義性は，文脈により，x のステータス，および x と X の間の関係が変化することによって，「x がクラス X の安定化されていない要素」であることが様々な解釈を受けることから生ずると考える。

以下，この仮説に基づき，冒頭に挙げた「とか」の4つの用法を順に再検討する。

4.「とか」の諸用法の再検討

4.1.「一部例示」: x は既構築されたクラス X から選択される一部の要素

ここでは「x_1とか，x_2とか」という形式のみ取り上げる[8]。

(6)　休日は読書とか，散歩とかして過ごしています。（＝（1））

(7)　A：フランスはどこを旅行したんですか？ B：パリとか，リヨンとかに

行きました。

これらの例文において, x_1（読書／パリ）と x_2（散歩／リヨン）は,「休日の過ごし方」や「旅行先」のクラスがまず話者の頭の中で想定され, その中から話者が「選択」した具体的事例であると考えられる。冒頭でも見たように, これらの選択された要素はクラスの一部に過ぎず, 明示されていない他の要素（＝他の休日の過ごし方／他の旅行先）の存在が暗示されている。したがって, x_1, x_2が「安定化されていない要素である」のは, これらの選択された要素によって, クラス全体（＝休日の過ごし方すべて／フランスでのすべての旅行先）を言い尽くすことができないためである。森山（1995 : 140）も指摘するように, x_1, x_2は「仮に挙げられた（…）一候補に過ぎない」のである。したがって,（7'）のようにx_1, x_2がクラス全体と一致するような文脈の場合,「とか」に制約がある。

（7'） A : フランスはどこを旅行したんですか？ B : ＊パリとか，リヨンとか 2つの町に行きました。

（7''） A : フランスはどこを旅行したんですか？ B：パリとか，リヨンとか，色々な町に行きました。

ところで, 当然のことであるが,「選択」するためには, 選択肢のクラスが文脈において既に与えられて（＝既構築されて）いなければならない。寺村（1991）は,「や」と「とか」を比較し, 前者が「一部列挙」であるのに対し, 後者は「一部例示」であるとしている。その上で, 一部列挙が例示（寺村によると「たとえば」と言えることが指標）になっていなければ「とか」に置き換えられないとし,「向こうで走っている人を何人かの人を見て」,（8）は言えても,（9）は不自然であるとしている。

（8） 李君や，林君や，王さんが走っている。（*ibid.* : 211）

（9） ？李君とか，林君とか，王さんとかが走っている。（*ibid.* : 212）

本稿の仮説の枠組みで解釈すれば,（8）における制約は, ただ「向こうで走っている人を何人か見」ただけでは, x_1, x_2, x_3が要素であるような共通した特性を持つクラスが構築しにくいことから説明されると考えられる。実際,「友人の」などを加えてクラスを明確に導入すれば自然な発話になると思われる。

（8'） あっ，友人の，李君とか，林君とか，王さんとかが走っている。

次に, クラスXの一部の要素であるx_1, x_2の関係について考えてみよう。森山（1995 :141）は,「とか」について,「何かを選ばねばならないという環境で使わ

れ, 過去の一回的な事実をただ単に言い切る場合には（...）かなり言いにくい」として, 次のような制約を挙げている。

（10）?? 彼はとってきた魚を煮るとか焼くとかした。（*ibid.*）

この例文では, クラスXは,「魚の調理方法」と考えられる。「何かを選ばねばならない」という森山の指摘は, Xの要素である, x_1とx_2がどちらも等しく選択される可能性を持つことを前提とする。これを, x_1とx_2がクラスにおいて「共存する」, または「非差異化されている」と呼ぼう。ところで, この例文においては,「とってきた魚」はア・プリオリには複数の個体として解釈される。そして, 2つの述語であるx_1とx_2が過去の時点に位置づけられることによって, 必然的に, ある魚にx_1が結びつき, 別の魚にx_2が結びつくことになる。その結果, x_1とx_2はそれぞれ別々の魚に対する調理法として実現（選択）されてしまい, 調理法として共存できなくなってしまうのである。また, 上記の例文の「とってきた魚」を「この魚」に置き換えて1つの個体として解釈させても, 今度は, 物理的に, x_1とx_2が同時に成立する可能性がなくなるため（一匹の魚に対して, 同時に「煮る」と「焼く」はできない), やはり制約が生ずる。

（11）?? 彼はこの魚を煮るとか焼くとかした。

この制約を解消するには,「命令」や「助言」の文や,「はずだ」「ちがいない」などの認識的モダリティによって, 未実現・非確定を導入する必要がある。

（12）a. この魚は 煮るとか焼くとかしろ。

b. この魚は煮るとか焼くとかしたらいいよ。

c. 彼はこの魚を煮るとか焼くとかした｛はずだ／にちがいない｝。

こうすることによって,（12a〜c）は, いずれも, 魚の調理法のクラスにおいて, x_1とx_2が等しく選択される可能性を持つ選択肢として共存できるのである[9]。

以上,「とか」が「一部例示」用法として機能する場合には, 非差異化されたx_1, x_2が, 既構築されたクラスXから, 等しく選択されうる・選択された具体的要素として解釈されることを見た。Xからのxの「選択」にウエイトが置かれたケースであると考えられる。

4.2.「断定回避・ぼかし」: xは, それが代表であるようなクラスXの要素

洞澤・奥村（2015）はこの用法を,「「〜とか」の曖昧性を利用して物事を断定せずにぼかして相手に伝える」と特徴づけている。多くの先行研究で指摘され

ているように, この用法は次のように,「xとか」の形式で現れ,「一部例示」が「単独用法」として用いられる場合と, 形式上は全く同一である。

（13）（旅行中にホテルで友達に）「トランプとか持ってない？」（洞澤・奥村 2015 : 7）

（14）私，便箋とか持ってない。（砂川 2000 : 66）

しかし,「一部例示」は, 既構築されたクラスXからxをその一部として選択するケースであり, xは具体的に指示できるような要素と考えられる。それに対して「断定回避」の用法では, xを代表として, それに比較しうるような要素のクラスXが構築されるケースであると考えたい。つまり, ここでの「xとか」は, xそれ自体を指示しているわけではなく, xを代表とするようなクラスを指示していると考えられる。そこから,「曖昧性」や, x一つだけに「限定しない」（cf. 洞澤・奥村2015）などの解釈が生じると考えられる。（13）では, 話者が対話者にx（トランプ）自体を持っているか否かを尋ねているというよりも, トランプに代表されるようなゲームの類を話題にしていると考えられる。同様に（14）においても, 砂川（2000 : 66）が正しく分析しているように,「便箋そのものというよりも, 便箋のように手紙を書き留めるたぐいのもの」が問題になっており, この点が,「とか」を伴わない,「私, 便箋持ってない」と大きく異なる点である。

そこから, この用法が「おおよそ」の事柄を述べる場合にも用いられうることが説明できると思われる。

（15）当時はまだ20歳とかでしたから，何も分かってなかったんですよ。

（16）毎朝，遅くとも7時とかには目が覚める。

（15）でも,（16）でも,「とか」は, xを中心（＝代表）としたその前後の数字を含む（＝比較しうる）クラスを問題にするため,「20歳ぐらい」,「7時ぐらい」という解釈が生じるのであろう。

さらに, このタイプの「とか」において, xはx自体を指示するよりはむしろ, それが作るクラスXを指示することから,「直接に物事を指すことを避け, 表現を和らげる」（劉2011 : 8）ために使われる,「直示軽減」と呼ばれる用法も説明されると思われる。

（17）学部との交流とかってありますか？　（劉 2011：8）

（18）大学院の試験とかって難しかったですか？（*ibid.*[10]）

次のような例文もこの用法に入ると思われる[11]。

（19）（友達に対して兄弟がいるか聞くときに）「妹とかいる？」（奥村・洞澤 2015 : 8）

（20）（気になっている異性と話しているときに，その人に対して）「〇〇君は，彼女とかいるの？」（*ibid.* : 7）

以上，「断定回避・ぼかし」用法に関しては，x がクラスXの一部であるという「とか」の仮説において，x が「代表的要素」として，x に比較しうるクラスXを構築し，x はそのクラスの要素であると分析できると思われる。この意味では，x が，既構築されたクラスXから選択される要素である「一部例示」の用法とは逆に，x がクラスXを構築すると考えられるのではないだろうか。

この観点からは，この用法は，4.1. で見た「一部例示」用法から「派生」したものでは必ずしもなく，固有のメカニズムを持っていると考えられる。なお，この用法において，「x がXの安定化されていない要素」であるのは，x がクラスを指示するため，指示対象が x だけに限定されない（指示対象として安定しない）ことであると解釈できる。

4.3.「強調用法」: 例外的 x がクラスXに属する

洞澤・奥村（2015）はこのタイプの用法について，「話者が判断するプラスまたはマイナス評価の事態を強調して，それに対する気持ちを表現するという表現機能を認めることができる」と述べ，「とか」が，「すごい」，「さすが」などの「プラスの評価」を表す述語，また，逆に「ありえない」，「どうしよう」などの「マイナス評価」を表す述語と共起することを，この用法の形式的特徴として指摘している。

（21）（バレーサークルでバレーの上手い子をみて）バレーできるとかすごい！（*ibid.* : 10）

（22）（次の日にテストが迫っているとき友達と）明日テストとか，本当にどうしよう！（*ibid.* : 11）

洞澤・奥村（2015）に従えば，これらの「強調用法」の例文では，x にあたる「バレーできる」と「明日テスト」が，プラス評価やマイナス評価をともなって「強調」されて提示されていると解釈することになる。しかし，この「強調」のメカニズム自体はどこから生ずるのかを説明する必要があると思われる。

上記の研究に先立つ天野（2001）は，このタイプの「とか」用法を「卓立的提

示」と呼び, 次のような例で「強調」のメカニズムを説明する。

（23）[オリンピックで予期せずメダルをとったことを喜んで]　銅メダルとかとっちゃって。（*ibid.* : 104）

（24）[自分でも驚くような出来事を語る場面で]　ラーメンとか食っちゃってんだよ！（*ibid.* : 105）

天野（2001）は, これらの例文について,「とか」が標示する「銅メダル」や「ラーメン」は, それ以外の要素と並立するものとして提示されている（「一部例示」）のでもなく,「断定回避」しているのでもなく,「ほかのなにものでもない」ものとして強調されて提示されると指摘する。そして, この卓立的提示も, 実は, 集合の「一部例示」として説明できるという仮説を立てる。その際想定される集合とは,「評価の際立ったものの集合」であり, x がそのような集合の一部例示として提示されることから,「卓立的提示」の解釈が生じると説明する。例えば,（23）では,「銅メダル」は,「価値の高いもの」の集合の一部例示であり,（24）では,「ラーメン」は,「女性が一人で一人で食べるには大変おかしな食べ物」の一部例示であるとされる。

それに対して本稿では, 次のようなメカニズムを考える：ア・プリオリにはクラスXに入ることが予期・期待されない x が, 実のところはクラスの一要素であることが確認され, それが「例外的」であることによって「強調」のメカニズムを生みだす。従って,「とか」の「強調」用法においては, 4.1. で見た「一部例示」のように, クラスから一部の要素が「選択」されるのではなく, 提示された要素 x が予期せずクラスの一部となっていることが確認されるという意味で, 要素 x がクラスXへ「所属」すること自体にウエイトが置かれていると言える。

この考え方を元に例文を分析してみよう。（21）は洞澤・奥村（2015）に従えば, x（＝「バレー」）が「プラス評価」を持つ例である。前提として考えられるのは, 話者にとって x は, 自分にはできないことである。その意味で, x はア・プリオリにはX「できること」のクラスに入らず, 例外的な要素である。しかし, 対話者にそれができることを確認している。結果として, 例外的な x が「できること」のクラスXに入るということになり, そこから,「賞賛」や「驚き」の解釈が生ずると考えられる。「マイナス評価」が現れる（22）においても, x（＝明日テスト（があること））は, 話者にとっては,「明日の出来事」のクラスに入ることが望まれていないが, クラスに所属してしまっていると解釈できる。つまり, 一方で x は

Xに属することが確認されるが, 他方で話者にとってxはXに属すことが望まれていないため, そこから「困惑」や「絶望」(cf.「どうしよう」) が表明されていると考えられる。

(23), (24) も同様の分析が可能であると思われる。(23) は, 話者にとっては取るはずがなかった・取れるとは思ってもみなかったx (=「銅メダル」) が「とったもの」のクラスXに入っているのであり[12], (24) は, 話者にとっては「一人で食べるには大変おかしな食べ物」(cf. 天野 (2001)), つまり, 食べることが論外であるようなxが, 実際は食べたもののクラスXに入ってしまっているのである。

以上をまとめると,「強調用法」や「卓立的提示」と呼ばれる用法は, xがクラスXの一部であるという「とか」の仮説において, xが「例外的要素」というステータスを持っていることが重要である。つまり, 話者によって, xはア・プリオリにはXに所属しない (クラスの外にある) という想定・予期が前提としてあるため, それに反してxがXに所属するということが,「プラスやマイナスの評価」にもつながっていくと考えられる。なお,「強調用法」において, xが「安定化されていない要素である」というのは, xのXへの所属が, 話者にとっては予期しない・期待しないものであるという意味で, いわば, xが今だクラスの正規のメンバーであるというステータスを獲得していないことと考えられる。

4.4.「引用マーカー」: xはXに属しているが, 確定できない要素

最後に「とか」が「引用マーカー」として機能する用法を扱う。冒頭でも見たように, 辞書や多くの先行研究は, このタイプの「とか」は, 引用句の内容 (=x) が「不確か」であることを示すと指摘している。また, 砂川 (2000) は,「実際の発話, 心の中の思い, アイディア, 考え方などは, 絶対的に正確なものとして後で再生されることはない」(*ibid.*: 72) とし, このタイプの「とか」を,「曖昧性」という観点から分析している。

確かに, 次の例のように, 話者が第三者から聞いた発言を引用しているような場合は, xは「不確か」であったり,「不正確」であったり,「曖昧」であったりするかもしれず, 発言の内容を完全に再録していない可能性もある。

(25) 太郎から, 次郎が北海道に転勤になったとか聞いた。

しかし, 次の例のように, 話者が自らの発言を引用している場合はどうであろう

か？

（26）今日は忙しいとか言ったけど，暇になったから後で会わない？

x「今日は忙しい」は，確かに元の発言を完全に再録していない可能性はある。しかし，たとえ「今日は忙しい」が発言の完全な再録であったとしても，この例での「とか」の使用には問題がないと思われる。次の例がそれを示している。

（27）A：今回こそは締め切りに間に合わせます。B：とか言って，間に合った試しがないじゃないか。

この例では，Bが，元の発言であるAの発言をそのまま再録しているため，「不確か」でもなければ，「不正確」でもなければ「曖昧」でもない。にも拘わらず「とか」の使用が可能なのである。このような場合に「とか」が使えるという事実をどのように説明すればいいのであろうか？

本稿では，この用法の「とか」に関しては次のような仮説を立てる：話者は，既構築された元の発言Xをその要素xとして再録するが，xを「確定しない・できない」ことをマークする[13]。言い換えれば，「とか」を使うことで，xがXの完全な再録か否かに拘わらず，話者はXをxとして再録こそすれ，xに対していわば，距離をとったり，留保を示したりすると考えられる。この考え方をもとに例文を分析してみよう。

（25）では，話者がXをx「次郎が北海道に転勤になった」として再録するものの，例えば，聞き間違えなどの可能性を考慮して，xを確定しないことが「とか」によって表されていると考えられる。（26）では，話者は自らの元の発言Xを，「xと」ではなく，「xとか」で引用している。話者は，（おそらく故意に）「とか」を使うことによって，Xを確定していない発言xとして再録・提示し，発言を撤回することを容易にしていると思われる。

「引用マーカー」としての「とか」をこのように考えることで，先行研究では扱われていない，（27）や（28）のような，話者が相手の発言に対する「疑い」を表明するような例文も同じ原理で説明できると思われる。

（28）お前はフランス語は苦手（だ）とか言って，いつもテストでいい点とっているじゃないか。

これらの例文では，話者は，対話者の発言Xをxとして再録しつつも，それを確定しない（それに対して距離をとる）ことで，相手の発言が「疑わしい」・「信用できない」ことを表明していると考えられる。

また,「とか言って」は, 次のような脅迫じみた発言や, 相手の発言を否定するような場面でも用いることができる。

（29）a.（B が A に仕事を押し付けようとしている場面で） A：いやです。
B：何？「いやです」とか言って，タダで済まされると思ってるのか？
b.（同じ文脈）B :「いやです」とか言ってんじゃないよ。

（29a）では，B は「いやです」を A の発言としてそのまま再録するものの，確定はしていない（まだ額面通りには受け取っていない）ように提示しつつ，もし確定したら，ひどい目に遭うと警告している。（29b）では，B の発言を再録しつつも，確定する（「いやです」をそのまま受け入れる）ことを拒否していると言える。

以上,「とか」が「引用マーカー」として機能するケースでは, x はXの再録であるという意味で, Xに属しているとみなすことができるが, 話者はxを確定しない・できないという意味で, x は「確定されていない（＝安定化されていない）要素」であると考えられる。

5. 結語

本稿では, 多義語「とか」の意味的同一性を「話者がxをクラスXの安定化されていない要素として提示する」という仮説として提案した。これに基づき, 意味的同一性は保たれながらも, 4つの用法それぞれにおいて, xのステータス, およびxとXの間の関係がそれぞれ異なる解釈を受けることが,「とか」の多義性を生み出していることを説明しようと試みた。

註

1 筆者は, 数年前から日本語の研究, 特に日本語の助詞の研究に取り組んでいるため, フランス文学がご専門である小倉先生の退職記念号に, このような日本語についての論考を掲載することを何卒お許し頂きたい。なお, 本研究は, 2020年度慶應義塾大学・学事振興資金（個人研究）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。

2 但し,「とか」, およびそれを構成する「と」と「か」それぞれにどのような統語的ステータスを与えるかは辞書や先行研究によって異なる。この点に関しては, 川島

（2016）に詳細な調査がある。

3　出典が示されていない例文はすべて筆者の作例である。

4　中俣（2015）は，この特性を「―［マイナス］網羅性」という素性で記述している。

5　磯村（2004）; 大和（2010）; 山下（2017）なども，この「配慮表現」という観点から「とか」を分析している。同じような観点から，Taylor（2015）もある。Taylorは，「とか」が特に文末に現れる場合を分析し，「とか」が助詞の文法カテゴリから脱範疇化し，語用論マーカーとして再構成されるという仮説を立てている。その結果，「とか」は，会話のストラテジーとしての「非直接性」，「曖昧性」，「和らげ」などの目的で使われるようになると主張する。

6　本稿が依拠する理論的枠組みについてはCulioli（1990, 1999a, 1999b, 2018）などを参照されたい。

7　一般に用いられる「集合」ではなく，「クラス」というタームを用いるのは，複数の要素の集まりが，「何らかの共通した特性」を持つことをより強調するためである。

8　紙幅の関係で，「xとか」の形式の単独用法は扱わない。

9　但し，このことは，「とか」の使用が未実現や未確定の事態に限られることを意味しない。実際，（7）では過去の事態が問題となるが，「パリ」と「リヨン」がどちらも「旅行先」として非差異化されているため可能である。

10　劉（2011）は「ぼかし用法」として，「直示回避」のほかにも，「例示暗示」（「お茶とか飲もうか。」），「断定回避」（「10時とかまでなら大丈夫かなー」）を区別している。

11　ただし，これらの例文が単に「直示回避」であるのか，「類」を指示しているのかについては明確に区別することは難しいようである。どちらの用法になるのかは，xに相当する名詞句の性質が多かれ少なかれ影響を及ぼすと考えられる。しかし，どちらにしても，根底にあるメカニズムは共通していると思われる。

12　ただし，この発話の前提として，話者がオリンピックでの自分の優勝を確信していた場合は，「銅メダルとかとっちゃって」は，予想に反して，銅メダルという格下のメダルをとってしまったという，「マイナス評価」を受けることになり，「後悔」などを表す解釈になりうる。cf.「銅メダルとかとっちゃって，残念です。」

13　この用法においては，xがXの部分的再録でない限りは，今までのようなクラスXとその要素xのような関係を厳格に記述することは難しいが，Xを再録するxは，Xに属していると言うことは可能であると思われる。この意味で，元発言Xとその再録xの関係も，広い意味でクラスとその要素と考えておく。

参考文献

Culioli, Antoine（1990, 1999a, 1999b, 2018）: *Pour une linguistique de l'énonciation*, tomes 1-4. Ophrys, Lambert-Lucas.

Taylor, Yuki（2015）: « The evolution of Japanese *toka* in utterance-final position », Hancil, S. et al.（eds）: *Final particles*, Berlin : Mouton de Gruyter, p.141-156.
天野みどり（2001）:「若者言葉 : 銅メダルとかとった（特集2「少年」の現在）」,『東西南北』, 和光大学, p.100―107.
泉原省二（2007）:『日本語類義語表現使い分け辞典』, 研究社.
磯村智子（2004）:「話し言葉の助詞「とか」について」,『日本語教育論集』第13号, 姫路獨協大学大学院 , p.34―40.
川島夏希（2016）:『現代日本語における助詞「とか」の機能』, 慶應義塾大学文学研究科国文学専攻日本語教育学分野, 修士論文 .
砂川千穂（2000）:「日本語における『とか』の文法化について―並列助詞から引用マーカーへ―」,『日本女子大学大学院研究科紀要』第6号, 日本女子大学, p.61―73.
寺村秀夫（1991）:『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』, くろしお出版.
中俣尚己（2015）:『日本語並列表現の体系』, ひつじ書房 .
洞澤伸・奥村佳奈（2015）:「若者言葉「～とか」の強調用法について」,『岐阜大学地域科学部研究報告』37, 岐阜大学地域科学部, p.1―17.
丸山直子（1996）:「話しことばの助詞―「とか」「なんか」「なんて」―（鳥居フミ子教授記念号）」,『日本文學』, 東京女子大学, p.122―136.
森山卓郎（1995）:「並列述語構文考―「たり」,「とか」,「か」,「なり」の意味・用法をめぐって―」, 仁田義雄（編）『複文の研究（上）』, p.127―149, くろしお出版.
山下悠貴乃（2017）:「配慮表現としての「とか」について」,『筑波大学地域研究』38, p.127―138.
大和啓子（2010）:「「とか」による例示について」,『筑波応用言語学研究』17号, 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース, p.17―27.
劉暁傑（2011）:「ぼかし表現「とか」についての考察」,『相愛大学人文学研究所研究年報』第5巻, 相愛大学人文科学研究所, p.48―35.